



個別報告 : 日・台大震災に学ぶ医療危機管理の課題 (地震防災を考える 日本と台湾を例として)

鎌江, 伊三夫

(Citation)

震災対策技術展 神戸大学都市安全研究センターシンポジウム, 6:73-73

(Issue Date)

2002-02-15

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/80020134>



日・台大震災に学ぶ医療危機管理の課題

神戸大学都市安全研究センター

都市安全医学研究分野

鎌江伊三夫

1995年の阪神淡路大震災は甚大な人的被害を生じ、我が国の集団災害医学・医療史上、さまざまな課題を投げかけた歴史的な分岐点となった。続いて1999年に台湾では、阪神淡路大震災と同等クラスの大地震が中部の集集を中心とした地域に発生し、台中市から北部の台北市に至る広汎な地域にわたって2300人余の死者を出す大災害となった。

この台湾大地震に対して、神戸大学医学部および都市安全研究センターは発災直後より直ちに救援・調査活動を開始し、以降、さまざまな協力活動を展開してきた。台湾大地震では、す早い心のケアへの対策がとられるなど、阪神淡路大震災の教訓が活かされた点があることが評価される。あらためて阪神淡路大震災で得られた教訓を振り返るとともに、台湾大地震と比較して日・台の災害医療対応について報告する。

さらに、このような大震災が契機となって生じたはずの社会的、集団的リスク対応への必要性の認識が、必ずしも、昨年の明石歩道橋事故やBSEパニックにみられるような問題に対して有効に作用していない現実や、ニューヨーク同時多発テロ事件にみられるような新たな災害医療の問題点を展望し、今後、社会的不安が増大しつつある都市の安全と健康を守るためには予防医学的な視点からのリスクマネジメントとコミュニケーションがますます重要となることを報告する。

